

第1回 野田村復興支援交流活動 活動報告会

2011年6月10日(金)17:00~20:00

於:コラボ弘大8F 八甲田ホール

東日本大震災の発生をうけて設立された弘前大学人文学部ボランティアセンターは、弘前市やNPO団体などと連携して、4月から岩手県九戸郡野田村の復興支援・交流活動を行ってきた。今回、東日本大震災から3カ月目となる6月11日を前に、これまでの活動を振り返るとともに、今後の活動をいっそう力強いものにすべく、第1回活動報告会が開催された。会では、弘前市長葛西憲之氏による講演、首都大学東京准教授・弘前大学非常勤講師の山下祐介氏による基調講演をはじめ、津軽地域の様々な人々によって行われてきた復興支援・交流活動の報告、さらにフリーディスカッションが行われた。会場となったコラボ弘大8階の八甲田ホールには、100名を優に超える参加者が来場し、活動への関心の高さが表れていた。

冒頭、遠藤正彦学長は、「この大震災に際して、皆さんの『人を助けてあげたい』『人の手でやりたい』『もう一度来たい』といった自発的な思いは、本当に感動的でした」、「今日は、私も一聴衆として、皆様方の活動について勉強させていただきたい。今日の会が、皆様方にとって有意義なものとなるように願います」と挨拶し、開会となった。以下は、各講演、報告の概要である。



主催者挨拶
弘前大学長 遠藤正彦



第1号

2011年8月4日

目次

大学との連携、市民との協働が力に (葛西憲之氏)	2
津軽・弘前と東日本大震災 (山下祐介氏)	3
行政の役割 (庄司輝昭氏)	5
食べにけーしょんの意義 (土岐司氏)	6
震災支援に津軽の衆知を集める (三上直樹氏)	8
受け入れという支援のかたち (渋谷拓弥氏)	9
野田村のために学生ができること (日野口早希氏)	10
チーム・オール・弘前 市民の声	11
フリーディスカッション	13
これまでの活動状況・これからの活動計画	16



葛西憲之 弘前市長

「大学との連携、市民との協働が力に」

弘前市長 葛西憲之氏

この度の大震災によって亡くなられた方々のご冥福と、被災された方々に対し心からのお見舞いを申し上げ、一日も早い復興をお祈りします。

学生の人口が5%を超える弘前市だが、その4分の3が弘前大学の学生である。経済効果だけでなく、弘前市全体の街づくりという面においても、弘大あつての弘前市であると言っても言い過ぎではない。野田村支援においても、弘大の学生・教職員の果たしている役割はとても大きい。本来大学に求められる研究・教育・医療など以外の分野においても、例えばシンポジウムから市民との協働にいたるまで、様々な場面で弘前という町の大きな柱であり、また今後もそうであってほしいと思う。

その市民との協働について、弘前市では、平成14年の奈良美智展が、市民のボランティア活動に火をつけたと言っただけかと思う。その後、弘前市民の善意の手が数多く育てられてきた。弘前市の職員のなかにも、職員としてではなく、ボランティアとして参加している者がたくさんいる。今まで、弘前市の職員がこういう形で活動したということはあまりなかったもので、本当に嬉しいことだ。

そして、野田村支援の主力となってボランティアとして働いたのは、数多くの市民であり、団体・NPOであった。その引き金となったのが、今日の主催者、弘前大学人文学部ボランティアセンターに関しておられる皆さんである。3月下旬に山下さんたちの活動を報道で知り、是非こちらから話を聞きたいということで、山下さん・李さんたちに来てもらった。そのとき、本当に熱意をもって逆に私を説得され、私も大いに心を動かされた。私も当時、どういう形で支援をすればいいのか随分と悩んでいたが、その時に弘前市が野田村を一对一で支援する(対口支援)ということになった。これならば確実に支援の輪

が広がっていくと思い、それからは全力投球で野田村支援という方向に動いた。全国的には、なかなか対口支援という考え方が広がっていないが、国・県といったレベルで、どんどん組み合わせを作り上げていくべきではないかと思う。

支援していくにあたっては、弘前市も身銭をきってやるんだという、強い意志と覚悟を示すことが大事だ。弘前市は震災後の3月23日、1億6300万円という補正予算を組み、これがNPO活動・市民ボランティア活動のバックボーンになったと考えている。今でも、市がチャーターしたバスが野田村へ定期的に出ているが、是非この取り組みはこれからも長く続けていきたい。無理をせず長く支援を続けることができる、身の丈にあった支援を、と思っている。逆に市も市民も、野田村支援から学ぶことが大変たくさんある。被災体験を聞くということだけでも、防災対策など、いろんな形で具現化していける。

支援のニーズも変化している。これまでは片づけ、今度は物資の仕分け、次は仮設住宅におけるコミュニティをどう守るか、その後はいよいよ復興。そうなってくると、都市プランナーの派遣なども必要になってくる。あるいは長期の避難所生活となれば、保健師の派遣なども必要。フットワークよく、支援の体制をつくっていくことが必要になってくると思うし、それをやることで野田村は全国の被災自治体の復興モデルになるような、そういう支援のあり方をこれから進めていければと思っている。

中三の例が示すように、震災後、弘前は経済的に大変な状況になっている。自粛ムードが吹き荒れ、弘前も窒息寸前だった。そういった状況を打開するためにも、また、被災地を長期にわたって支援するためにも、支える側が元気であればと思う。そこで、弘前や弘前に来られる方々に元気になってもらうため

「市民・行政・大学が重層的にかかわることで、さくらまつりへの招待が実現できた。」

に、岩手県・宮城県の方々をこの地にご招待した。皆さん、大変元気になってお帰りになった。行政だけでこういう問題を扱うことはなかなかできない。野田村の人たちの心には、自分だけどうしてさくらまつりを見に行けるのかといった思いもあったようだが、NPOや商工会議所の青年部が橋渡しをしてくれて、行こうという雰囲気を作ってくれた。市民・行政・大学が重層的にかかわることで、はじめて実現できたのだと思う。

山下先生が、数ある被災地のなかから野田村を取り上げたのは、本当に先見の明であった。市民ボランティア以外の行政支援も、被災者の方々を招待したときに「交流」をメインとしたことも、すぐれた着眼点であったと思う。そうした大きな流れがあったから、観光弘前は失速しなかった。また、具体的な支援メニューを一緒に進めることを通じて、市民と行政との協働の形がつくられ

たとも思う。

仮設住宅への入居が進んで、ある程度の落ち着きが見えてきたら、今後は野田村の子どもたちにも交流に参加に参加してもらい、弘前の子どもたちと一緒に岩木山や白神で遊んだり、ねぶたではじけてもらいたい。野田村の仮設住宅は校庭に建っているのだから、遊んだり運動したりする場所がない。だから、弘前へ来て、一緒にスポーツしてもらいたい。

これから被災地では長い復興の道のりが続くことになるが、弘前市では、被災地に寄り添い、長く支えていくつもりである。それは弘前市民にも、教訓や思いやりの形で返ってくる。みなさんからのご意見も、いろんな形でわたくしどもにお伝えいただければありがたい。どうかこれからも、皆様のご支援とご協力をお願い申しあげる。

「野田村が全国の被災自治体の復興モデルになりうるような支援を、これからも進めていきたい。」

基調講演「津軽・弘前と東日本大震災—支援から交流へ—」

山下祐介氏(首都大学東京准教授、弘前大学非常勤講師)

まず、なぜ野田村を支援するようになったのか、その経緯について振り返ってみたい。そもそもの発端は、3月11日の震災時、翌日の後期入試を受けに弘前を訪れていて、帰れなくなった学生さんのフォローをしたことだった。人文学部の先生たちがいろいろやってくれたが、その時わたしは、身近な人とのつながりを総動員しようと考えた。その後、3月22日には、以前から交流のあった大阪大学の渥美先生(社会心理学。ボランティア論を中心に研究)と京都大学との調査団が来て、私はかれらと八戸を視察した。八戸はだいたい落ち着いていたので、自分はそのまま弘前に戻ってきた。すると次の日の夕方、八戸からさらに南下していた渥美先生から電話があり、「あまり報道されてないが、野田村が大変なことになっている。弘前は野田村を助けてほしい」、というSOSが届いた。このこと

を提案しようと、弘前感交劇場やわらかネットの場に出向いたところ、土岐さんから「弘前市民の力を結集して野田村に行きたい」と声があがった。本来その当日は、弘前の観光の回復が中心議題だったが、被災地を支援する観光地だから人が来てくれる、だからまずは支援の体制をつくらなければ、という話になった。3月25日には第一次先遣隊として私たちが野田村に出向いたが、まだ行政がパンクしててどうしようもないということで、いったんは帰った。そこで、陸奥新報や東奥日報にはたらきかけ、世論喚起を促した。葛西市長にどうやって会うかと画策していたところ、先に市長の方から声がかかり、28日に市役所で会談、すぐに弘前市から野田村への職員派遣の検討に入ることとなった。翌29日には、企画部長の蒔苗さんを連れて野田村へ行くことができた。



山下祐介氏

「まるで設計されていたかのように、いろんな人たちとの連携で、野田村に行くことが決まっていたように思う。」

ところが、企画部長を連れて行って「弘前から職員を派遣しますよ」と言っ、野田村の方で「すぐ来てください！」となったかという、実はそうではなかった。現行のルールでは、派遣というのは依頼があって初めて成立するもので、その費用は依頼した側が出すことになっている(つまりこの場合、野田村が費用を負担することになる)。私の想像だが、野田村の方としては弘前市の本意をつかみかねていたのかもしれない。そもそも、その一週間以上も前に野田村は岩手県庁に派遣を依頼していたそうで、その返事がないなかで勝手に野田が動いていいのか、という思いもあったようだ。その2日後、職員2名を連れて行くと、実際は「待ってました！」という感じで、学生まで連れて行こうとする始末。本当はのどから手が出るほど職員派遣して欲しかったんだということが、当日になってわかった。逆に言うと、野田村の人たちはあれこれと要望を素直に言うタイプの人たちではないので、その辺に注意してお付き合いしていかなければいけないかもしれない。一方大学でも、作道先生を中心として「震災を考える会」ができ、それがきっかけになって李先生の心に火がつき、「ボランティアセンターやるぞ！」ということになった。こうして振り返ってみると、まるで設計されていたかのように、いろんな人たちの連携で、野田村に行くことが決まっていたように思う。

こういった活動をするとき、支援か、交流か、という話がよく出てくる。この震災では、弘前自体も経済的打撃を受けたし、本当は被災地支援どころではないのかもしれない。けれども、被災地支援をすることによって色んな効果が生まれていることも事実。それがやはり、弘前さくらまつりへの野田村の人々の招待だったと思う。全国でこのニュースが流れたことで、結果として、弘前をアピールできた。その意味では、野田村のおかげで、弘前市民自身が力を得ることができたともいえる。その後の支援でも、野田村という具体的な相手がいてこそ、弘前市の支援活動も増幅し

て、市民の力が沸き上がってくることでできた。そういうことがあると、野田村からも要望が自由に出てくるのではないか。今後も、一方向的な支援ではなく、相互支援という形で、「お互いさま」というくらいの関係性の方がうまくいくと思う。

中国では、四川大地震のときに、「対口支援」という方策が用いられた。これは、特定の被災地と特定の被災していない地域がペアになって支援活動を行い、復興を競わせたものだ。対口支援にはいろいろ批判もあるようだが、今回の東日本大震災も規模が大きく、こうした対一の関係が必要だと思われる。ただし、日本型の対口支援の問題は、県や国からの指示を待って調整ばかりということが多く、そうすると効果的な支援ができなくなってしまう。本来は、する方、受ける方、双方が選ぶお見合い型が理想ではないか。さらに、行政間の交流だけではだめで、住民どうしの交流が必要。弘前市と野田村との関係は、今回のモデルケースになっている。自分は、岩手だけでなく、宮城や福島、色々な被災地で、各地域からの支援活動を見てきたが、官民一体でうまくやっているところは少ない。東京でのボランティアの参加者にきいてみると、「自分が何をできたのかわからない」という声が多い。これは、被災地が多すぎて、ターゲットが決まっていなかったせいだと思う。弘前は、野田村という、目に見えるちょうど支援できる大きさのパートナーを得たことで、「何かしたいがどこに何をしようかわからない」、「いろいろやったが何ができたかわからない」という泥沼に入らずにすんだ。

今後のことについて述べてみたい。厳しく聞こえるかもしれないが、災害がこれで終わるだろうか、そのことをよく考えないといけない。首都直下型の大地震や、東南海・南海大地震もこれから起こると指摘されている。そういったときに、国や科学技術が私たちを守ってくれるだろうか。自分たちのことは自分たちで守る、また、普段から身近で信頼できるおつきあいをして、いざというときの関係を確かなものにしておかなければい

けない。

私は、ここ2～3年、過疎問題・限界集落問題をやってきた。弘前の人たちは、西目屋や相馬の状況はほとんど見えていない。今回野田村を見に行ったのだから、そこで後ろを振り返ってほしい。助けを求めているところはたくさん

ある。そういったところをどう再生していくのかという課題に気づき、野田を応援しながら、自分の足元を見つめ直して、よりよい都市―農村関係の構築、地域再生につながっていけばいいと思う。そのヒントが、野田村再生の過程において、いろいろ出てくるはずである。



「今回野田村に行った方々には、後ろも振り返ってほしい。青森にも、助けを求めているところはたくさんある。野田を応援しながら、自分の足元も見つめ直してほしい。」

第1報告「行政の役割 ～これまでとこれから」

庄司輝昭氏(弘前市被災地支援対策室)

今日私が話すことは、はっきり言って、行政がやったこと、これからやることの宣伝である。しかし、これはとても重要なことだと思っている。というのは、私自身ボランティア・NPO活動をしており、その立場からすると、行政からの情報提供が少ないと思っているからだ。

まずは、避難者の受け入れについて。弘前市は、市営住宅、雇用促進住宅、民間アパート、ホームステイ等のかたちで、総計1500人を受け入れている。それから、支援物資、義援金の提供について。3月に送ったのは米、ミルク、衛生用品、防寒具、長靴、乾電池など、いわゆる災害対策用の物資だった。ところが4月になると、茶碗、マグカップ、シャンプー、ボディソープ、ヘアブラシ、まな板、アルミホイル、栓抜きなど、ほとんどが日常生活用品。1ヶ月でもニーズがガラッと変わっている。また、被災地への市職員

の派遣は、野田村のほか、宮古市(既に終了)、山田町(6月3日にスタート)に対して行なっている。それ以外にも、職員が全くのボランティアとして参加している。市職員の派遣は、口約束では7月2日で終了ということになっているが、その後についてはこれから協議ということになる。

こうした行政の活動以外に、ボランティア活動の支援も行なっている。野田村へのバスのチャーター、不足している消耗品などの支援、そしてマスクに大きく取り上げられたのは、さくらまつりへの被災者招待である(野田村、仙台市、気仙沼市、宮城県山元町の方々をご招待した)。さらに5月に入ってから、弘前に避難してこられた被災者の方々に対し、一世帯あたり5万円の見舞金を支給した(2人世帯で22300円、3人世帯で32800円をさら



庄司輝昭氏

「野田村から出てくる新しいニーズを的確にとらえ、できる限り復興のお手伝いをしたい。」

に上乘せ)。申請数は48世帯、金額にして300万円あまりになった。

ここで一つ面白い事例として紹介したいのは、百石町の写真館ハセガワさんが行なっている「写真復元プロジェクト」である。野田村では多くの写真が水につかったが、写真プリントは水につかると保存がきかないので、最終的には処分せざるをえない。その前に、野田村の歴史や町並み、人の表情を、地域の文化として残しておこうと考えたわけである。野田村にもその重要性を理解してもらえ、保存のための選定委員会ができ、住民に保存する写真を選んでもらっている。その選んでもらった写真を、長谷川さんたちがデジタル化している。長谷川さんは、「写真には人を幸せにする力がある」と話していた。こうした取り組みは、専門家が専門家として支援することができるという、一つの良い事例だ。

実を言うと、最初に野田村の方々を

招待しようとしたとき、一部には「さくらのない弘前に招待してどうするんだ」という反対の声もあった。しかし、野田村の方がおっしゃるには、「弘前市民の方々に色々なことをしてもらった。一日も早く弘前に行って、自分の口から弘前の人たちにお礼が言いたい」と。市長はじめ私たちはとても感激し、それで27日の招待が実現したのである。

先ほど市長の講演にもあったが、まちづくり・復興の段階となれば、その専門家を派遣するということも考えられる。ただ、現段階では、これから何が出てくるかわからないという部分もある。野田村から出てくる新しい取り組み、新しいニーズを的確にとらえ、できる限り復興のお手伝いをしたいと思っている。

(注:本報告内の数字は、庄司氏が弘前市のHPを閲覧した時点の数字。)

第2報告「食べにけーしょんの意義」

土岐司氏(野田村応援隊)

実は、私は3.11が私たちの活動のスタートになるとは考えていなかった。2月28日、弘前感交劇場の実務者会議「やわらかネット」のなかで、今後弘前の観光をどうしていこうかというディスカッションがあった。そこで私は、観光事業者ではない普通の人が出て行くことによって関わっていく、市民の意識を全体的に広げていくという考えが必要だろう、というようなことを言った。そうしたところで、3.11が起きてしまった。残念ながら起きてしまったこの災害だが、これに対しても普通の人として関わっていこう、変な言い方だけれど、これは弘前市民にとっては良いチャンスかもしれないと私は思った。弘前市以外の人みんな弘前のお客さんであり、そのお客さんを我々がケアしていく。これが、今回の震災に対する私の考え方である。「津軽衆有志支援隊」と名付けたの

は、そうすることで、弘前を中心とした広域観光に携わっている人達が、みんなそこに参画してくれるのではないかなと思ったからだ。

地震が起きてから22日の会議までは、私たちは何ができるのか、「支援」とか「援助」という言葉でいいのかと、考えていた。どんな言葉を使ってもやらなきゃいけないことは一つだろうけれど、どんな思いでそこに関わっていくのかは、とても大事なことだと思う。やわらかなタッチのものが一番大切だと考えている。

私のようなものが野田村に飛び込んでいって、最初は冷たい目で見られた。しかし、何度も顔を出すたびに、野田村の人たちの緊張がほどけていった。そこで私は、「これはものを食わなきゃ」と思った。「同じ釜の飯を食う」という表現があるように、もの食べば仲良



土岐司氏

くなれると考えたわけである。それが「食べにけーしょん」という言葉だった。誰でも、寒い時に冷たい弁当ばかり食べてちゃいやになる。そこにあったかいものを持ち込めば、ちょっと心がほだける。この「食べにけーしょん」の陰には、それを支えてくれた弘前のたくさんの業者さんがあった。黒石の人達は、「食べにけーしょんって、ただ作って出せばいいんだか？」なんて言っていたが、作りながら「大変だったべ？」なんてしゃべればいいんだと私は言った。そういうやり取りが「食べにけーしょん」の醍醐味だと思っている。

ボランティアの作業について、私たちは「ここをきれいにしたい」と思っている。でも、被害を受けた人達は違う角度から、片付けられていく姿を見ている。私たちが片付けたものは、彼らの生活のかげらなんだ。そのかけらがなくなっていくことを、感謝しながらも、彼らは心のどこかでさびしい思いをしていた。「自分の生きてきた足跡が消えていくんだ、形がなくなっていくんだ」と、私のそばでボソッとつぶやく人もいた。ただ、そういうつぶやきが言えるような関係まで、私たちは彼らとの距離を縮められたのかなと思っている。

今回、弘前の粘っこい地域力の中に、弘前大学の学生さんたちが入ってきた。これは大きな意味があったと私は思う。なぜかというと、教育は学校だけでやるものではない、地域の人と一緒にになって育ててもらうんだ、と僕は考えてるから。学生さんたちは、慣れないスコップの使い方を市民から指導されたりしながら、ボランティアを続けてきた。これは学生にとっては大きな学びであったはずだ。同時に、大学生が地域社会に出ていくことは、地域を盛り上げる力でもあると考えている。

さくらまつりの話だが、「さくらまつりに私も行ったかったんだが、断られた。」「あなた被災してないのに行ったの？」などという話も、村のなかでちょこちょこ出てきた。第一回目に来た人のなかには、大変な軋轢を感じた人も中にはい

た。だから、我々がよほど注意していないと、逆に現地の人々を傷つけてしまうこともある。それで、今度の花火の実行委員会は、野田村の人全部を対象として招待している。村の中の凸凹を、今度は私たちが別の形でとりなしていかなければならない、と感じている。

最後に。「野田村から弘前の人が消えたら、野田村は暗くなる。」これは、野田村の人達の言葉である。いま、全国的にボランティアに入る人が少なくなっているなかで、弘前の人野田村にいる景色は、あの人達にとっては絶対になくしたくない景色なんだろうと思う。また、人的被害のなかった地区の人達は「下に降りてって村に行くのがこわい」「村の人達の目がこわい」と言っていた。「私たちは何も被害受けてないという目で見られているが、私達も被害を受けているんだ。」という言葉を使いながら、涙を流したのを見ていた。地元の人には語れない言葉が、胸の中にたくさんある。だから、このあと行ったら、「津軽衆の人たちさだばしゃべれるかもしれないから、我々にはしゃべってちょうだい」というふうに、重く鬱積している思いを一枚ずつはがす作業ができれば、と思う。

どうか今後も、学生さんをたくさんボランティアとして派遣していただきたい。私も、若い学生さんたちと一緒に成長したいと思っている。



「弘前市以外の方は、みんな弘前のお客さん。そのお客さんをケアしに行く。それが、今回の震災に対する私の考え方だ。」

「私たちが村の中のデコボコをとりなしていかなければならない。」



三上直樹氏

第3報告「震災支援に津軽の衆知を集める

～情報共有の視点から～

三上直樹氏(動こう津軽！)

私は、「動こう津軽！」の仲間たちの支援活動について報告をしたい。

「動こう津軽！」結成のきっかけは、震災直後、市の情報収集・発信力の不足に直面したことである。また、停電だけで済んだ弘前が、同じ東北のために何かをする必要を痛感したこともあった。ネットで参加呼びかけたところ、急な呼びかけであったが、30人弱の参加者が集まった。3月21日に結成会があり、翌日、市に対し、官民共同で支援を行なうべきとする要望書を提出した。医療からITまで幅広い分野から仲間が集まり、民間でできることは何かを議論した。

取り組んできたこととしては、まず、メーリングリストの構築。今のところ、85名が参加している。また、サイトをつくり、情報発信もしている。4月10日には、精神科医の下田肇氏を講師として招き、被災者支援研修会を主催した。4月17日には、「けっぱれ！東北」支援ライブを実施。このライブは、メンバーの佐藤ぶん太が企画し、小西淳子さんも参加した。

「ホッと一息プロジェクト」は、医師の大竹進氏がリーダーとなって進めてきた。県の事業に乗って、保険医協会が事務作業や費用負担をしてくれた。第1陣は、桜まつりに136名の被災地の人々を招待、案内。大槌町・陸前高田市・釜石市の人々を呼び、浅虫温泉・辰巳館に宿泊した。第2陣は、現在進行中。花禅の庄・アップルランドに宿泊するグループはすでに終わり、今後、紅葉館・浅虫観光ホテルに宿泊予定のグループがある。

「写真復元プロジェクト」では、長谷川正之さんがリーダーとなって活動を進めている。野田村の小林フォトさんへ

機材を提供した。6月1日「写真の日」に第1弾、写真1枚を無料修復するもので8組の方々が依頼にこられた。このときは、黒石焼きそば隊と亀の甲町消防隊のポン菓子隊も同行した。長谷川氏は、今後は野田村だけでなく、大槌町から全国へと、プロジェクトを展開していきたいと考えている。

「大震災国際漫画展」について。弘前市在住の漫画家・山井教雄さんが世界中から集めた漫画の展覧会が、6月4日から8日まで、ギャラリールネスで開催された。50点の作品展示があり、支援金のお礼として絵葉書・ポスターを配布した。また、ギャラリートークも2回開催した。今後の展開として、清掃工場プラザ棟での長期展示が決まっている(7月下旬～9月末)。朝日新聞弘前支社の外国人記者が、これを取材して世界発信してくれている。非常に意義のあることが、瓢箪から駒でできてしまった。

これから大事なことは、さらなる情報共有、コラボの推進だろうと考えている。新たな分野からの支援としては、デジタルデータ復元プロジェクトを明日試行する。さらに、ネットによる現地との情報交換や、「チーム北リアス」や「ゆいっこ」などとの連携を通じた、岩手県全体での長期的支援ネットワークの構築を視野に入れている。

「これから大事なことは、さらなる情報共有とコラボの推進。岩手県全体での、長期的支援ネットワークを構築していきたい。」

第4報告「受け入れという支援の形」

渋谷拓弥氏(ECOリパブリック白神)

私は、今日は弘前大学の皆様に感謝を言いたくて来た。本当に、皆さんのおかげで、元気をもらいながら支援を続けてこれたと思う。

(1枚目のスライドについて)これは火曜日くらいに市長に呼ばれて、山下さんと一緒に行った場面。このときに野田村という軸が決まったが、この「軸を決めた」ということは、すごく大きかったと思う。そのおかげで、他のところが「野田村は決まってるから他に行けるだろう」という感じになったのではないかと思う。

正直言うと当初は、支援とは現地に行くことだ、という感覚しかなかった。まさか「受け入れる」というのが支援になるとは考えてなかったのである。で、ご招待したわけだが、夜の食事会にお付き合いする時間があり、その時に野田村の方からお話いただいたことが、本当に心に残っている。土岐さんが最初に野田村に入っていった時に、野田村の皆さんに本当に信頼された一言があった。それが、「俺は野田村に来たくて来たんだ」という、そのたった一言だった、という話である。皆さんも「なぜ野田村なのか？」ということも考えたと思うが、逆の立場になると、理屈も何にもなく「来たくて来た」と言われるのが一番嬉しい。すごい一言だったと、今でも感じ

ている。

さくらまつり招待第一陣の昼食会のときには、ものすごい数の報道陣であった。これで、全国に「弘前は“受け入れ”という支援をやったんだ」ということを伝えられた。この翌日から、全国の民報各社で「東北に行ってあげることが支援だ」ということを発してくれるようになったのである。

私も地域を元気にしていこうという活動をしているが、いま、地域がだんだん経済的にも苦しくなっているのを感じている。「受け入れ」という支援は、お金が外に出て行かない。弘前市が組んでくれた予算は、地域のホテルに、飲食店にというふうに、この地域のために使われていく。そういう意味では、「受け入れ」という支援は大事だと思う。長くかかる支援だから、是非ともこれからは、「地元に来てくる」という支援をみんなで考えていければと思う。

私は白神山地で一つのつながりをもっているが、これから白神山地で「受け入れ」も含めた新しい支援の形ができてくるような感じがしている。そんな形で、これからも弘前大学のみなさんと一緒につながっていききたい。これからも活動を頑張っていただきたいと思うし、私も地域で受け入れの支援、お手伝いをさせていきたいと思っている。



渋谷拓弥氏

「支援には長い時間がかかる。これからは、“地元に来てくる”という支援について、みんなで考えていきたい。」



葛西市長をに協力を要請する山下准教授、渋谷理事長

(2011年3月29日東奥日報記事。渋谷氏のプレゼン資料より。)



日野口早希氏

第5報告「野田村のために学生ができること」

日野口早希氏(弘前大学人文学部ボランティアセンター)

ボランティアセンターは、山下先生の提案を受けて、李先生が立ち上げる形で設立された。6月8日の時点で計10回の活動に行き、参加者はのべ364名である。4月はマルイチ観光にボランティアでバスを出してもらっていたが、5月からは弘前市に定期便を出してもらい、「チーム・オール・弘前」という名で野田村に行っている。バスの中では、オリエンテーションと感想発表を行っている。オリエンテーションは、毎回初めて参加する人がいるので、すでに行ったことのある人が、その経験を伝えるために行っている。また帰りのバスでは、一人ひとりにマイクを渡し、全員に感想を話してもらっている。「これからも支援を続けたい」「もっと直接的な交流をしたい」といった声が寄せられている。

実際の活動では、手作業による瓦礫の撤去や、側溝の泥上げなどを行っている。学生は若くて力不足という時も結構あるが、そんな時に市民の方の経験や掛け声がすごく大きな支えとなっていて、学生と市民との協働が成り立っている。手作業で作業していると、写真やはがき、手紙といった思い出の品が出てくる。一見がれきに見えても、野田の人たちにとってはとても大切な宝物である。それらをこうして、役場前に一つにまとめている。個人宅のお手伝いでは、家主さんから感謝の言葉や差し入れをいただくことがあって、直接交流できるととても嬉しい機会になっている。さらに、役場前の体育館に山積みになっている救援物資を仕分けしたり、野田の方からの要望に答えて必要な物資をまとめたりといった作業をしている。また5月からは、月に一回のペースで、避難所や仮設住宅を回る「調査隊」を設けている。大学から公用車を借りて、一日中回っている。

6月8日には、私と李先生で、弘前市

の到達小学校に行ってきた。野田村では5月14日に仮設住宅への入居が始まったが、避難所から仮設住宅に移るということになる、高齢者の孤立化が懸念される。そこで、弘前の小学生の元気を総動員して野田の人たちを勇気づけようということで、小学生たちに手紙を書いてもらっている。今後さらに5校回る予定である。

「たすけあい ～などわど通信～」という新聞について。学生2名で野田村を回ったところ、野田の方から「こんなにたくさんの方が野田村にお手伝いに来てくれるとは知らなかった。もっとこのことを他の人たちに伝えてほしい」と言われた。何か情報を伝えたいと強く思っていたところ、山下先生から「もっと積極的に行動してもいいよ」とアドバイスされ、このような新聞を作るようになった。これを野田の方に手渡しで配ることで、直接交流もしたいと思っている。

ボランティアセンターのホームページでは、活動マニュアル・ブログ・活動報告書などを載せている。ブログは学生が、報告書は教員が書いている。是非ご覧ください。

弘前大学では、これからも若い力を結集させて野田に行きたいと思う。将来を担うのはやっぱり若者なので、もっとほかの大学生のみなさんにも積極的に支援・交流を一緒に行ってもらいたいと思う。

「弘前大学では、これからも若い力を結集させて野田村に行きたい。」

第6報告「チーム・オール・弘前 市民の声」

神照文氏・阿保道子氏・成田春洋氏

<神照文氏>

私がボランティアを思い立ったきっかけは、テレビで見た大津波の光景である。あの映像を見て、「自分も何かしなければ」と、いてもたってもいられない気持ちが起こった。

3月14日、早速ボランティア活動の情報を得るために県庁へ行ったが、これから立ち上げるところなのでホームページを見てほしいと言われた。16日、八戸でボランティア募集していることを知り、早速問い合わせたが、市内在住者に限定されているとのこと。18日、三沢市の災害ボランティアセンターへ問い合わせたが、ここも市内在住者のみで対応している、と言われた。

そうしたところ、22日の東奥日報で、弘前市によるボランティア募集、岩手県野田村へ派遣、という内容を見た。早速登録したが、まだ行方不明者も多く、連絡がくるのは1~2カ月先かなとのんびり過ごしていた。ところが30日、弘前市社協から「明日野田村へ行けますか」と連絡があった。急であったが、「もちろん行きます！」と即答した。

31日、初めてだったので若干不安はあったものの、何でもやろうという意気込みだけは人一倍強かった。土岐隊長より、避難所の被災者たちと一緒に「黒石焼きそば」を作り、食べる、という内容の説明を受け、いざ出陣。しかし、役場職員の少なさやボランティアセンターの機能もままならぬ状況で、予定していた食べにけーしょんはできなかった。その後、20数名が避難している集会所に行ったが、そこでも手違いがあり一緒に作れなかった。ただ、そこの年配女性が涙ながらに、祖父が津波で流されたことや、娘さんが警察・消防と一緒に行方不明者を探したこと、昔から営業していた食堂が全て流されたこと、近くの親戚の家も流されこと、など話してくれた。

実際に作業をするようになってからのこと、家主のおばあちゃんから何度も感謝の言葉をいただき、私一人でなくグループのみなさんで感激したことがある。その後、家の前を通るたびに御礼を言われ、ある日家族のみなさんと自然と握手できたことは、私にとって大きな財産となった。このことだけでも、ボランティア冥利というものだ。

ボランティア同士の交流でも実に学ぶべき点が多く、人間として成長しているように感じている。特に、弘大生と一緒に過ごしていると、自分自身も若返ってくるような気がしてならない。ただそばにいてだけで楽しいものだ(笑)。弘大生のみなさんは、本当に純粋で誠実で、しかも最後までやり抜こうという責任感も強く、好感のもてる青年ばかりだ。今どきの若者はひ弱に感じていたが、男女とも汗を流して懸命に作業する姿に、ただただ感服する。

学生さんには、自然の美しさは心を癒してくれるが、反面、人間がどうすることもできない自然の恐怖もあるということ、この大震災を通して後世に伝えていただきたい。また、これまで野田村に行かれた方はぜひ、一人でも多く参加するよう呼びかけて、先輩から後輩へとつなげていただきたい。

現在は瓦礫撤去が主だが、それらが終わるといよいよ被災者のみなさんに関わってくると思う。私が心配することは、高齢者の孤独死と、子供たちの心のケア。だから、高齢者・子どもとの信頼関係が重要になってくる。現在行っている瓦礫の撤去は、そのきっかけを作ってくれるものと確信している。

災害ボランティア活動は、人が何か困っている場合に、自分の持っている小さな力でその方がいくらかでも助かるのなら、私自身も幸せであり、また人として当然の行為であると思う。人間社会、お互いに支えあい、お互いにある



神照文氏

能力を出し惜しみすることなく有効に活用し、誰もが生きていることに喜びを実感できるような社会になればと思う。この災害ボランティア活動を通して、改めて命の尊さを再認識し、一人の生命は全地球よりも重いという言葉を噛みしめた。日本中にボランティアが溢れるようになれば、未来へ向けての希望はますます明るいものとなり、子々孫々へと継

承されれば最高だ。今後とも、いくらかでも野田村のみなさんに役立つならば、野田村の復興を願いつつ、ボランティア活動を続けたいと思っている。今回の災害ボランティア活動を通して、当たり前の普通の生活がいかに幸せであるかを実感できた。ほかのボランティア活動にも積極的に参加したいと思っている。



阿保道子氏

<阿保道子氏>

私は当初、看護師としてボランティアに参加したかったが、どこの団体にも所属してなかったので叶わなかった。何かできることはないかと探していたところ、弘大のボランティアセンターで拾ってもらえた。

個人宅で食器と食器棚を片づける作業の時、水につかった食器棚は拭いても拭いても泥が落ちず、大変だった。食器も仕出し屋かと思うくらいたくさんあって、スポンジ・タオル等を支援物資からもらいたいと思って言ったが、「そういう形の配給はできない」と言われ、悶着した。結果としてもらうことはできたが、理不尽でなかなか難しいものだった。

最初、野田村の人たちはあいさつしても目線をそらしたり、しらんぷりしていた。それが今では、住民の方から「弘前の方ですか」とか「ご苦労様です」「ありがとう」と声をかけてくれるようになった。また、他のボランティアの人たちとも挨拶を交わすようになった。いま李先

生の着ている、黄色いジャンパーの効果だったと思う。私自身、ジャンパーを着ると、「弘前を背負って野田村に来ているんだ」と再認識する。年齢に関係なく週に一回集まる人々が、同じ目的で同じ方向を向いているという、仲間の絆を感じる。実は、帰りのバスでの感想を、私は一回もしゃべったことがない。思いがありすぎてまとめきれないからだ。でも、聞くのはとても楽しいし、ためになる。

色んな立場があると思うが、基本は、被災者の目線に立って行動していかなければならない、ということだ。ここまでの関係を野田村と築くために、事務局の方々は相当苦労されたと思う。今後も、継続的に野田村に足を運ぶことが重要だと感じている。

行動したくても行動できなかった私を仲間に入れてくださった、弘大ボランティアセンターの李先生はじめ、事務局のみなさんには本当に感謝している。チームオール弘前として、引き続き参加したい。

<成田春洋氏>

実は私は中越の出身なのだが、中越地震のときも阪神大震災のときも、動けなかった。その思いが、今回、野田村へ行こうという思いにつながった。

もう一つ理由があって、自分は社会福祉法人の運営をしているので、職員

たちにぜひ現場をみてもらい、自分で考えて行動するスタッフを育てたいという企みもあった。

人文学部の先生方の熱い思い、学生さんたちが日々成長する姿に触れて、いつも出かけるのを楽しみにしている。



成田春洋氏

フリーディスカッション

活動報告会の最後には、李さんの司会のもと、活発なディスカッションが行われた。

ディスカッションは、ボランティア参加者へのアンケート結果の報告のあと、フロアの方からの発言を得て、議論を深めた。なお、以下の発言については、報告者以外は匿名として扱い、内容を損なわない程度に抜粋・要約をしている。また、敬称は略させていただいた。

＜アンケート結果の報告＞

(教員事務局・作道、日比野、山口)

毎週の支援バス運行の際に参加者に協力をお願いしているアンケートの集計結果にもとづいた報告である。

・参加者数

参加者は、5月までの8日間に延べ263名、このうち学生は157名だった。男女でみると、5月に入って女性の参加が増えた。これは、一般市民の女性で、行きたくても一人は行けないという人が多かったようで、そこに広報が行きわたるようになり、応募できるようになったと考えられる。

・参加者数の推移

4月は学生参加が多く、徐々に経験ある学生も増えている。しかし、新学期の始まる5月に入ると、一般の人がかなり多くなり、学生は一定の数で止まっている。ここからの課題としては、夏休みになったときに、学生の参加を促すことを今から行う必要があるだろう。センターとしては、現場の作業は、市民と学生の混成チームを作り、学生がリーダーをやるようにしている。学生に学びを持ってほしいからである。そういう意味では、一般の方が多くて学生がやや少なめなのは、むしろいいことなのかもしれない。

・参加理由

最初の頃は、今しかできないこと、ただ困った人を助けたい気持ちで来た、津波の威力を感じた、というような感想・理由を言う人が多かった。しかしだんだ

んりピーターが増えて、友人に誘われて、前回行ってきてやりがいがあった、現場の様子が分かった、疲れるけど達成感があるから参加する、などという、経験をベースにした理由が多くなっている。基本的には震災報道に接して、とにかく何かをしたかったという感想が多かった。一方で、自分がやっていることが本当に役に立っているのか、自己満足なのではという感想もある。しかし、人を助けたいことに悪いことは全くないので、それを生かしているのだから、そういう風に思う必要はないと思う。

・エピソード

今週、支援に行ってきた大事な話を聞いたので、紹介したい。地震当日、その方は津波について父親から聞かされていたので、高台に避難して無事だった。父親は「海が黒くなり、白くなった」と言っていたが、その通りのことが起こったという。ただ、高台から津波が来るのを見ていたのだが、何が起こったか今考えると思い出せない、今思えば、どこを見ていたのか思い出せないと言っておられた。この方が最初に行ったのは、自宅の天井までつまったガレキの撤去だった。そのときは誰も手伝いがなくて、非常に辛い作業だった。しかし、息子からの電話で弘大が支援にのりだしたと聞き、安心したという。ガレキ撤去などのボランティアやっていると、自分がやっても終わらない、役に立っているのかと思う時もあるが、このようなお話を聞くと、そこにいる、ということが大事だと思われた。安心感を与えることも大事な仕事をしているのだと思える。

フリーディスカッション①

フリーディスカッションは、野田村出身の方からの次のような発言から始まった。

発言

——野田村出身です。ここにいる人は野田村に行っているの、自分たちのことを頑張っている、という気持ちが伝わってきて、それは本当にありがたいで

「自分のしていることが役に立っているのかという感想もあるが、安心感を与えることも大事な仕事だ。」



渥美公秀氏

す。しかし、3月27日に「野田村」と新聞に名前が大きく載った時には、個人的には複雑な気持ちでした。今日は、なぜ野田村なのか、ということが疑問で参加しました。しかし、まだその明確な答えが、ストンと落ちてはいません。支援はたいへんありがたいです。ただ、弘前からの野田村支援について、村の人が知っているわけではありません。行政支援に行ったときに、野田村からの反応が薄かった、ということは、活動を知らないということもあったのではないかと思います。また、弘前が行ったときには、すでに久慈市からも行政支援が入っていて、すでに協力をもらっているのに他から協力をもらっていいのか、という葛藤もあったのではないかと思います。弘前からの支援が、人と人の軋轢、近隣市町村との軋轢を生んでいないか、心配しています。野田村には弘前が支援しているから、他からは支援しなくてもいいでしょう、ということになっていないか、と。そのような点を気に留めていただきたいな、と思いました。

発言を受けて、まず司会の李氏から、今は野田の方々がこのジャンパーを覚えていてくださっている、手を振ってくださる方もたくさんいらっしゃる旨、簡単に紹介があった。

その上で、基調講演を行った山下祐介氏と、日本災害救援ボランティアネットワークの大阪大学・渥美公秀氏より、応答がなされた。

山下祐介(首都大学東京)

——今回は大きい災害なので、どうしたらいいか分からないということが正直なところでした。支援という言葉でよいか、という話がずっと出てきています。ときに支援するのが上、支援されるのが下、支援されるのが当たり前という関係とか、これは常に対称関係ではないので、いびつなものに転換しうるのです。だから、今のよう話をしてもらおうことはありがたいな、と思いつながりながら聞いていました。

その上で、少し誤解があるかなと思うのは、これだけの被災地が広がっていて、原発事故もあって、支援は、南から北にだんだん入ってきますが、仙台あたりで

止まってしまうのです。それを僕も心配して、北側から支援しておかないと、いびつなことになってしまうだろうと思いました。南からあがってきて、支援に取り残されるだろうと。それから、久慈市が入っていたという話がありましたが、あの時、久慈市は31日までの支援、という話になっていました。それでちょうど我々も良いな、と。たぶん久慈は一時期入っていないと思うし、そのあとはどうなったかは知らないのですが。少なくとも4月前半は久慈は野田村に入らずにすんだ、というように理解しました。さらに、弘前から日帰り支援に入れるとすると、宮古が限界だと思っています。野田は、日帰りバス出して往復できるということであると、それは弘前側の限界だったと思っています。その上で野田でやろうと決めました。

渥美公秀(大阪大学、日本災害救援ボランティアネットワーク)

——当時は、南からたくさんの支援があるという状況でした。そして多くのNPOが東京に集まって南から支援するという情報を得ていました。北からということになって、八戸と縁がある方から紹介してもらって行ってみたら、野田に行つて欲しい、久慈に行つてみると、野田に行つて欲しい、と。それで野田の方に行くことになりました。もちろん、そこを通過して南へ行きましたが、最後、太郎町までいったら、もうそこにはボランティアがあふれていました。これは大丈夫だ、と、南はそこで止めました。一度出会ったら、そこが好きになるわけで、もめごとも含めて好きになるわけで、長い付き合いになるだろうと思っています。10年、20年の単位で考えていることだけはお伝えしたいと思います。

李永俊(弘前大学人文学部ボランティアセンター)

——今の声をいただいて考えなければならぬのは、今まで私たちは、被災された方々のケアリングというか、ガレキ撤去に精一杯でした。でも、もう少し大きな目で、土岐先生の話にもありましたが、街のなかでのぶつかりごとがないように、我々自身も少し経緯を説明する努力を、今後やっていかなければならないなと思っています。是非「チーム北リアス」の方で



李永俊氏

も、ご検討していただければと思います。

渥美公秀

——今のようなご発言は我々も把握しています。はなから個別訪問活動を私たちはしてきました。ガレキといっても、誰のガレキなのかを考えて、ガレキじゃないですね、誰の思い出の品なのかを考えて、対話という土岐先生がおっしゃった通りのことを、最初の訪問からやっています。だから、被災前の村で頑張ってきた方が誰なのか、その人たちが今どのように寄りあっているのか、過去何百年も前がどうだったのか、そうしたことを今、一生懸命学ばしていただいています。けっして神戸で経験したからといって、それをそのまま持ち込む気は一切なくて、いろいろとおつきあいさせていただきたいなと思っています。

フリーディスカッション②

続いて、別の参加者から、次のような質問があった。

発言

——先ほど夏休み、という言葉が出てきましたが、弘大の活動は、8月も続くのでしょうか。弘大は8月に授業が続き、テスト期間にも入ると思うのですが、呼びかけて続けていくということでしょうか。単位面の関係も気になっていました。

応答(李永俊)

——もちろんです。なんとかお金を準備して、3年、5年と野田村が元に戻るまでつきあうということをさせていただきたいと思っています。今の支援に行っている学生のみなさんが卒業・就職しても野田に遊びに行きたい、ということで一緒に行けるような体制を作っていきたいと

思っていますので、なんとかして実現できるように努力しています。また、次の手として後期から21世紀教育の科目で1単位を「東日本大震災論」ということを提唱しています。学生が3回ボランティアについて45時間のボランティアをすると1単位もらえるということを、大学の方でお願いしたいと準備しています。我々も智慧を絞ってやっていきたいと思っていますので、応援していただきたいと思っています。単位に関しては、参加する学生には何とかしたいなという思いはありますが、制度上さまざまな問題があって、できない面もあります。現在、設けられた制度の中で、準備できるものは準備したいと思っています。

また最後に、次のようなコメントがあった。

発言

——今までいろいろな報告会に何回か参加しました。先ほどのお話聞いて改めて感じたことなのですが、どうしても報告会という、こういうことをしました、しました、という報告が結構多くありました。そこにも被災者の方がいたら、どんな思いで聞くのだろうと時々感じていました。今日、わざわざ野田村の方がいらして、先ほどのお話を聞いて、改めて報告会ということ、もしかしたら被害者の方が聞いているかもしれないということを意識した上でする必要もあるのではないかと感じました。

そのほか多くの意見・感想があったと思われるが、時間が押しており、以上でディスカッションは幕を閉じた。
(ディスカッション部分まとめ：山口・作道)

「被災者の方が聞いているかもしれないということを意識した上で、報告会というものをする必要もあるのではないか。」



ボランティアセンター・これまでの活動状況

(7月20日現在)

3月29日：野田村視察

4月12日：野田村支援活動(以下、同)35名

18日：53名

25日：38名

5月6日：32名

11日：24名

14日：47名

18日：35名

25日：31名

6月4日：34名

8日：34名

18日：37名

22日：38名

7月2日：41名

6日：24名

16日：38名

20日：27名

ボランティアセンター・これからの活動計画

- 第2回活動報告会(9月頃を予定)
- 弘前大学人文祭にて、野田村物産展の開催
- 活動報告記の出版

弘前大学人文学部附属
ボランティアセンター

〒036-8560
青森県弘前市文京町1

電話&Fax 0172-39-3198
Email: eprc@cc.hirosaki-u.ac.jp
HP: <http://huvc.net/>

みんなのちからが
“ひとつ”になるとき